

# 私にとっての旅行産業とその未来

ピース・イン・ツアー

佐々木愛

## 新興国カンボジアで「幸せ産業」を興す

### 概要

私は2018年10月1日にカンボジアで旅行会社をスタートさせる。その準備のため、5月にはカンボジアに移住する予定だ。有名な世界遺産アンコール遺跡群を有するカンボジアは、1990年代後半より観光産業が飛躍的に発展し、今では世界各国から数多くの観光客が訪れる街となった。日本人観光客数は2000年代半ばから後半にかけてピークに達した。しかし、その後は次第に減少している。果たしてこのまま衰退の一途をたどるのか。私はそうは思わない。遺跡観光だけではない付加価値を見いだせれば、カンボジアの旅行産業が以前以上に明るい未来になる可能性が大いにあると信じている。人生の岐路に立つ今、私にとっての旅行産業とは何かを探りたい。そして、カンボジアにおける今後の旅行産業とその未来の可能性について考察したい。

### 過去の経験を振り返る

#### 出会いにあふれていた大学時代

大学時代は文化人類学を専攻し、石川県舳倉島でフィールドワーク調査を行った。舳倉島は石川県能登半島より北に約50キロメートルの日本海上に浮かぶ島。漆塗りで有名な輪島市海士町に属している。野鳥観察の聖地であり、豊かな漁場としても有名だ。私を含む研究室の学生約10名は、夏になると輪島から島へと移住してアワビ、サザエ、ワカメ、テングサを採集する「海女」の暮らしを知るための調査を行っていた。私が興味をもったのは海女たちの食生活。海女さんに日々どのような食事をとっているのかをインタビューした。その時に出会ったのが魚醤油だった。石川県では「いしる(魚汁)」と呼んでいる。塩辛い風味だが、島の人々は調味料として日常的に使っている。

長期休みには決まって海外旅行をしていた。航空券を購入し、宿は決めずに出発するバックパッカーの旅。アルバイトでお金を稼いでは海外旅行に費やしていた。大学2年生の時、東南アジアを陸路で周遊する旅を計画し、タイ、ラオス、ベトナムを巡り、カンボジアへ。当初の計画では、カンボジアからタイへ抜けて、マレー鉄道に乗って南下し、シンガポールから日本に帰国する予定だった。しかし、カンボジアがあまりにも居心地良かったので、シンガポールからの復路航空券を捨ててしまった。穏やかな人々の笑顔に癒され、おせっかいなほどの親切さを私は愛おしく感じた。毎日市場に通っていたのだが、そこで見つけたのが舳倉島で出会った「いしる(魚汁)」と同じ種類の調味料だった。カンボジアでは「タクトレイ(魚汁)」と言い、魚に塩を混ぜて発酵させて造る。衛生面で多少異なるが、製造方法は日本のそれと全く同じだ。使い方もほぼ同じ。炒め物、汁物、和え物など多種多様に使える万能調味料であり、春巻などのつけだれとしても使える卓上調味料でもあった。私はその不思議な飴色の調味料に強く魅かれた。タクトレイの小瓶を買いあさったので、台所は魚醤油であふれていた。

カンボジアとの出会いを果たした後、私の海外旅行の行き先には必ずカンボジアが含まれた。卒業論文

のテーマに「魚醤油」を選び、タイ、ベトナム、カンボジアの発酵食品について調査し、レポートした。

大学時代はたくさんの出会いにあふれていた。私の通う大学にはチューター制度があり、留学生が日本の生活に馴染めるように日本の学生と一緒に様々な交流活動を行っていた。私は外国人の友人が欲しかったので、チューターに立候補し、積極的に交流活動に参加した。主に中国の方が多かったが、一人だけカンボジア人の留学生がいた。私は彼に日本語を教え、彼からカンボジア語を教わった。いつか海外で日本語を教えてみたいと思うようになったのはこの経験があったからだと思う。

## 多国籍雑貨店を運営した 1 年間

同級生たちが就職活動に奔走している時、私はひたすら居酒屋のアルバイトに精を出した。ゆえに私は就職活動というものをしたことがない。卒業後は私と同じく大学時代に旅行ばかりしていた友人 4 人が集まり、多国籍雑貨店を立ち上げることにした。当時、シャッター街となりつつあった富山市の商店街では、若者たちの起業を応援し誘致する取り組みが行われていた。幸運なことに私たちは雑貨店をオープンできるブースを安く借りられることになった。節約のため、一軒家を 4 人で借りて暮らすことにした。今思えば、シェアハウスの先駆けだ。2 畳ほどの小さなお店なので店番はひとりで事足りた。日中はアルバイトをしながら当番制で店番をし、4 人のうち 1 人が海外へ買い付けに出かけていた。私はタイ経由でインドへ行くことが多かったが、その度にタイから陸路でカンボジアへ渡り、アンコールワットのある街シェムリアップに立ち寄った。元々遺跡や歴史に興味があったのでシェムリアップはまさに私の聖地だった。

店に立つ時、私たちが心がけていたのは商品の出所をお客様に丁寧に説明することだった。布であれば誰が織ったのか。人形であれば誰がつくったのか。商品をただ売るのではなく、それがつくられた国の文化や習慣を語ることで、海外に興味を持ってもらう。そのことに私たちは大きな喜びを感じていた。今現在、日本の旅行業界に身を置いているが、雑貨店を運営していた時と同じことをしていると思う時がある。旅行も商品。ただツアーを売るのではなく、参加することでどんな体験ができるのか。その国の人たちの文化や習慣を知り、現地を想像できるような説明をするよう努めている。

## カンボジアで暮らした 7 年間

2001 年、カンボジアへの移住を決めた。日本語教師の仕事を探していたが、仕事先が見つからなかった。当時、続々と建ち始めていたホテルのゲストリレーションに求人があり、まずはカンボジアに暮らし始めたいという一心で応募し、その 2 日後にはフロントに立った。経験も実力もない私がよく採用されたものだと思って思うが、英語とカンボジア語が必須となり、毎日勉強に明け暮れた。思うようにいかないことも多く、お客様にもスタッフにも迷惑をかけた。そんな私を勇気づけてくれたタイ人のジェネラルマネージャーには本当に感謝している。

旅行ではなく、仕事で滞在することで、カンボジア人との関わりも変化した。ホテルで働いた 1 年間は、カンボジア人の良いところも悪いところも知ることができ、私にとって大変勉強になった。

ホテルで働き始めて 3 カ月ほど経ち、本来やりたかった日本語教師の仕事を探し始めた。夢を諦めないように、ホテルスタッフ向けに日本語教室を開いたり、民家の軒下を借りて日本語を教えたりした。ある日、日本人男性の結婚パーティが日本料理レストランで開催され、児童養護施設を運営するひとりの女性に出会った。年齢が近いこともあり、すぐに打ち解け合った。彼女との出会いは、その後の私の人生を大きく変えることになる。彼女の話によると、自立支援の目的で施設内に日本語教室を開いているが、日本人教師が近々辞めるため、教師が不在になるとのこと。私は、ぜひやらせて下さい！と手を挙げた。チャンスが舞い込んだと思った。こうして大学時代から抱いていた海外で日本語を教えるという夢がかなった。

ホテル退職後は児童養護施設に住み込んで日本語を教えた。運営者である女性は何でも話せる親友となった。カンボジアに暮らした 7 年間、幾度となく支えてもらった。彼女は今でも私の尊敬する大切な友人のひとりである。

児童養護施設での日本語教室にとどまらず、病院やホテルで日本語を教えたり、現地旅行会社でオペレーターのアルバイトをしたり、雑貨店の立ち上げをやらせてもらったりした。何でも経験と思って様々な世界に飛び込んだが、二足の草鞋を履くには時期尚早で、最終的には日本語教師に専念した。7 年間のカンボジア滞在に幕を閉じる理由はひとつではなかったが、20 代を過ごしたカンボジアに別れを告げ、2008 年、日本へ帰国した。

## 派遣添乗員から旅行会社社員へ

帰国後、しばらくは札幌の実家で過ごした。大学入学と同時に家族と離れ、大学卒業後すぐにカンボジアに移住したので、久しぶりの家族との生活だった。1 カ月弱が過ぎた頃、友人の紹介で派遣会社を訪ねた。そこで派遣添乗員という仕事があることを知り、新しい生活をスタートさせた。初めは北海道内のバス添乗。慣れてくると飛行機に乗って本州へ。20 代をカンボジアで過ごした私にとって、仕事とはいえ日本の観光地を巡れることに喜びを感じた。程なくして沖縄へ移住し、沖縄の島巡りのツアー等に添乗した。訪れる観光地のことを先輩添乗員に教えてもらい、さらに自分で勉強してお客様にご案内する。仕事とプライベートの境目のない生活だったがとにかく楽しかった。

2010 年、多国籍雑貨店を立ち上げた友人のひとりと一緒に東京で暮らすことにし、海外添乗員の仕事を始めた。さらなる知識や語学が求められ、自分を成長させる良い機会となった。そんな折、カンボジア現地法人ピースインツアー・アンコール社代表の紹介で現在所属するピース・イン・ツアーを知り、外注添乗員としてカンボジアへ。派遣添乗員の仕事はやりがいはあるが、ツアーが終わればお客様とのつながりは途絶えてしまう。添乗したツアーの改善点を見い出したとしても、報告するだけでツアーを企画することはない。私はそこに虚しさを感じていた。

幸運なことに私は正社員として採用され、インドシナ地域を訪れるツアーの企画、手配、添乗を担うことになった。ピース・イン・ツアーはカンボジア、ベトナム、ラオス、ミャンマー専門の旅行会社で、特にスタディツアーに注力している。現在、私はスタディツアー営業部に所属し、一方通行ではない交流を取り込んだツアーづくりに励んでいる。

## 無駄なこととは何ひとつない

40 代をスタートさせた今、私はカンボジア現地法人を設立するための準備にとりかかっている。ピースインツアー・アンコール社がクローズすることを知った時、私は三日三晩悩んだ末、カンボジアへの移住を決めた。かつて日本語を教えた子どもたちが大人になり、それぞれ自立した生活を送っている。ピースインツアー・アンコール社にも 3 名の児童養護施設卒院生が日本語ガイドとして働いている。私の教え子たちだ。彼らとともにカンボジアの未来を考えたい。何より自分がわくわくすることをしたい。自らの 20 代と 30 代の経験を振り返る時、何ひとつとして無駄なことはないと実感する。過去の経験があるからこそ今の自分がある。私を支えてくれた人たちに心から感謝している。

## カンボジアにおける観光産業の現況

### 経済発展と観光客数

カンボジアは 24 の州と首都プノンペンで構成されている。面積は約 18 万平方キロメートルで日本の約半

分の大きさ。ベトナム、ラオス、タイの 3 国と国境を接し、国土の大半がジャングルと呼ばれる森林地帯だ。雄大なメコン川と広大なトンレサップ湖が穀倉地帯に水を供給しており、国民の約 8 割が農業を生業としている。人口約 1,500 万人のうち、1 割が首都プノンペンに集中する。プノンペンはカンボジアの経済成長とともに発展を続けており、近年では日本企業の進出も活発だ。2014 年にはカンボジア国内初の本格的ショッピングモールであるイオンモールプノンペン、さらに 2015 年にはカンボジア国内初となる日本資本のホテル東横インプノンペンがオープンした。また、三菱商事、三井住友銀行、パナソニック等の企業も市内に事務所を設置している。2011 年以降、カンボジアの経済成長率は毎年 7%をキープしている。まさに新興国と呼ぶにふさわしい現況だ。

第二の都市とも呼ばれ、観光地として繁栄している街シェムリアップは、世界遺産アンコールワットを有し、世界各国から観光客が訪れている。2017 年 10 月に調査した観光省の統計によると、2004 年には観光客数が 100 万人に達した。それは 1993 年の 10 倍だ。その後、さらに数字が伸び、2016 年には 500 万人をマークした。内訳を見ると、その 2 割を中国人が占めている。断トツの 1 位だ。ベトナム、ラオス、タイと国境を接する周辺諸国が続き、韓国、アメリカ、そして日本。日本は 2000 年代後半に上位にランキングされていた。しかし、2017 年現在は 7 位となっており、約 18 万人の日本人がカンボジアを訪れた。微増ではあるが前年度よりも増加している。

## 「観光人類学」の観点から考える文化復興

観光人類学とは、観光や観光地化が在来の文化に及ぼす影響について考える文化人類学の新しい分野で、アメリカの人類学者 N.グレバーンなどによって提唱された。観光用に演出された「観光文化」は伝統的な文化に比べて低く評価されがちであるというが、果たして本当にそうだろうか。

カンボジアの伝統舞踊の事例に触れたい。その前に、カンボジアの近現代史について記述する。カンボジアは数奇な歴史をたどった国のひとつだ。1953 年にシハヌーク国王によってフランス植民地時代より脱し、国家として独立したのも束の間、1970 年には資本主義勢力が強まり混乱に陥った。1975 年、それに乗じて生まれたのが原始共産主義と呼ばれる過激な思想を持つ者たちだった。彼らはクメール・ルージュと呼ばれ、それを統率したのがポルポトだった。都市部に暮らす住民を農村に移住させ、強制労働をさせた。ポルポト政権にとって知識を持つものは不要だった。知識人、医者、職人、教師は皆殺しにされた。芸能人、歌手、俳優、僧侶なども虐殺の対象になり、さらには文字が読める者、美男美女、海外渡航経験者、挙句の果てには眼鏡をかけているだけで処刑の対象になった。伝統舞踊を舞う踊り子たちもそのほとんどが虐殺され、伝統は壊滅した。まだほんの 40 年前の出来事である。

観光地シェムリアップには伝統舞踊であるアプサラダンスを鑑賞しながらディナーが楽しめるレストランが数多くある。大きなステージを有し、伝統楽器の生演奏とともに優美な舞いを愛でることができる。ステージに立つために踊りの技術を磨く踊り子たち。観光客用に行う舞踊がよりカンボジアらしいものを目指した結果、伝統的な芸能が再活性化し、その維持にも役立っている。伝統が壊滅してからのスタートでよく現状まで復興したものだ。そこには観光すなわち旅行産業の力があつたことは否めない。観光文化は様々な形で伝統的な文化と関わり合う。このような考え方は今後の健全な観光開発のために必要な視点と言える。

## 「ボランティア」から「スタディツアー」へ

前出のポルポト政権時代には国民の 3 分の 1 が亡くなったと言われる。政権が終わった後もカンボジアの人々は教育を受け入れることができなかった。知識をつけることでいつ殺されるかわからない恐怖を抱いていたからだ。そのため、カンボジアは周辺諸国に比べて教育がたち遅れてしまった。教育局が整備されて

きた現在は、教師の人数も知識も増えて教育現場が改善されてきている。しかしながら村の小学校では未だに情操教育と呼ばれる授業は行われていない。教える先生もいないし、教材もない。

2000年代、“ボランティア”、“孤児院”ツアーが増えた。そのほとんどが“恵まれない”子どもたちを支援する趣旨で催行されるツアーだった。日本人がカンボジアの子どもたちに何かをしてあげてくれることを「ボランティア」と呼び、小学校や施設を訪ねる内容だった。

2004年、ピース・イン・ツアーは現地法人ピースインツアー・アンコール社とタッグを組んで孤児院を訪れるスタディツアーを催行した。しかしそれは前出のツアーとは全く趣旨の異なるものであった。そのツアーは、性的虐待や暴力を受けた子どもたちを保護する模範的な施設を訪れ、その教育方針を伺い、自立支援の一環として行われている語学授業を見学するという内容だった。現地法人代表は施設代表と何度も話し合ったうえで交流内容を決めていた。子どもたちを楽しませることを第一に考え、日本の参加者もカンボジアの子どもたちも学びを得られる一方通行ではない交流を大切にしていた。上から目線の援助ではなく、対等な立場での国際交流を目指し、継続してツアーを催行している。現在、カンボジアの福祉局は、経済孤児(親はいるが貧しくて一緒に暮らせない子ども)を受け入れてきた施設を閉鎖させ、児童養護施設の役割を果たす施設のみを存続させる方針を打ち出している。今後、カンボジアにおける“孤児院”ツアーは消えていくだろう。

## 日系旅行会社の現状と模索

2017年10月の調査によると、日本からの観光客数は前年からは微増したもののほぼ横這い。「日本人が減り、仕事が少なくなりました」と日本語ガイドは口々に言う。ガイドを辞めて他の仕事をする者も少なくない。2016年9月より成田と首都プノンペン間に全日空が直行便の就航を開始した。急速に発展するプノンペンへの企業進出を背景にビジネスリップにねらいを定めているようだ。しかし、成田プノンペンの往復航空券にカンボジア国内線を追加すれば、戦跡が多く残るプノンペンと遺跡を見学できるシェムリアップの2都市を周遊するツアー企画が可能だ。カンボジアの歴史学習を目的とするスタディツアーにぴったりのプランだ。

アンコール遺跡観光だけで集客ができた時代は終わりを告げた。2000年代、土産店やマッサージ店ではコミッション世界が形成されていたが、観光客の減少にともなってその存続が危うくなっている。この現状を理解し、日本人観光客を誘致するにはどうすればよいか。それはカンボジアの旅行産業に携わる者たちにとって目下の課題だ。遺跡以外のツアーや観光エリアの開発、SNSを使った情報配信、ビザの無料化など、いくつもの対策が考えられる。アンコールワットのある街シェムリアップと日本の直行定期便の就航もそのひとつだ。プノンペンを基点とするツアーの造成や直行チャーター便を増加させる働きかけも日本人の誘致につながるだろう。最近ではカンボジア日系旅行業協会発足に向けての動きもあり、各社が脱「現状」を模索している。

## カンボジアにおける観光産業の未来

### 平均年齢 24 歳の国カンボジアで

高齢化社会を迎えている日本と比較し、カンボジアは圧倒的に若者が多い。約40年前の凄惨な歴史を振り返るとその理由が容易に理解できる。教育が否定され、知識人が粛清された時代。当時、成年を迎えていた人たちは虐殺の対象となった。ゆえに日本であれば各機関の主力となる40代以上の人口が極端に少ないのである。内戦後に生まれた世代が今のカンボジアの原動力となっている。

現地法人ピースインツアー・アンコール社では、20代から40代までのスタッフが働いている。全員が誠心誠意をもって仕事を全うしている。年齢が若いので経験値は不足しているかもしれないが、それをカバーす

るだけのパワフルさを持ち合わせている。私は日本の高度経済成長期を知らない世代だが、敗戦から復興した 1950 年代の日本と今のカンボジアが同じ状況なのだろうと想像している。カンボジアの経済発展はめざましく、勢いはとどまることを知らない。今後、観光産業の分野でも若者たちの活躍が大いに期待できるだろう。カンボジアの未来は明るい。

## 人づくりは国づくり

これからのカンボジアにおいて一番大切なことは「教育」である。17 年前、ホテルのフロントスタッフとして働いていた時、カンボジア人の同僚に何かを依頼すると、きまって「オッチェッター(できない)」という答えが返ってきた。その度に私は彼らに失望し、わからないことがあれば先輩や上司に質問してやるぐらいの気持ちを示してほしいと苛立った。しかし、彼らは「できない」のではなく「知らない」のだ。もし丁寧に教える人がいたら、彼らはできたかもしれない。当時の私はまだ若く、そのことに気づけなかった。今の自分であれば彼らへの接し方も違っていただろうと後悔している。

カンボジアは現在、平均年齢 24 歳の若い国である。可能性を秘めた「人財」の宝庫だ。私は今後もさらに発展し国を支えていこう観光産業の分野において、若者たちの人材育成に貢献したいと考えている。特に首都プノンペンや観光地シェムリアップは語学学習熱が高い。日本語教師をしていた経験を活かし、カンボジアという国の未来を担う若者たちが飛躍する一助になりたい。

## 一方通行ではない経営を目指す

ピースインツアー・アンコール社を切り盛りする日本人代表は、確固たる信念をもって経営を進めてきた。その根底にあるのはカンボジアへの愛情だ。自らが愛するカンボジアの素晴らしさを、お客様に直に伝えたい。その情熱がすべての原動力になっている。私がカンボジアで旅行会社を経営するにあたり、日本人代表とビジネスパートナーであるカンボジア人代表の志を受け継ぐことは大前提だと考えている。もちろん社員スタッフは全員引き受ける。信頼できる彼らとともに切磋琢磨し、未来を夢みて歩く覚悟でカンボジアへの移住を決めたのだ。

カンボジアのことを熟知しているのは他にもないカンボジア人だ。彼らが日本人に知ってほしいと思うカンボジアの魅力を発信したい。そして、私の心を動かすカンボジアを直にお客様に伝えていきたい。日本人もカンボジア人も互いに喜びあえる旅とはいかなるものか。私は血の通った人間だからこそできる「出会い」と「体験」にあふれた旅づくりを目指す。そして、人を喜ばせる旅、人を幸せにする旅をつくっていききたい。旅行産業を「幸せ産業」にする努力を惜しまずに続け、カンボジアの旅行産業を盛り上げていく。

## まとめ

私はカンボジアで起ち上げる現地旅行会社の社名を「Ai.TRAVEL」にするつもりだ。「カンボジア愛」の愛と私の名前の愛、そして旅行産業の未来を視る目の eye をとって命名した。Ai の i は、2017 年 4 月より 1 年間学ばせていただいた旅行産業経営塾の BSTi の i をとった。ひとつの会社の経営を担う者として、旅行産業経営塾で教わった「ものの見方、考え方、決め方」を大切にしたいからだ。

私には忘れられない授業がある。2017 年 11 月 11 日に行われた元旅行産業経営塾塾長の山田學氏による「旅行産業らしさ」の講義だ。司会を担当していたこともあり、私は終始緊張していた。業界の大先輩であり、数々の実績を残してきた講師の一言一句には魂がこもっていた。その情熱は未だ燃え盛り、「旅行産業とは」を改めて考えるきっかけをいただいた。山田學氏の本「旅は人に生きる喜びを与えるものです 塾長・山田學の物語」は私のバイブルとなった。この本を読み返すと自ずと勇気が湧いてくる。旅行業は「人を

喜ばせる産業」であり、「人を幸せにする産業」だと実感する。

私は、かつて 7 年間暮らしたカンボジアで再スタートを切ろうとしている。新興国カンボジアで、お互いに尊重し合える現地の人々と対等な立場で接し、一方通行ではない心の通った経営を目指していく。最後に、私に夢をもたせてくれた方々と、ともに夢を見る仲間感謝の言葉を述べたい。有難うございます。